

## 医学博士宮川米次君の「鼠蹊淋巴肉芽腫症の病原体に

## 関する研究」に対する授賞審査要旨

宮川米次君が、本病の病原体を発見した昭和十年（一九三五年）の頃は Schenbe の所謂氣候性横痃にかかった患者が、伝染病研究所病院を訪ねるのが決して稀でなかつた。それが梅毒、軟性下疳、淋疾等による横痃とは、色々の点において差があることに気付いた。しかも剔出した横痃の組織にも著差があり、その組織内に異常に多くの大単核細胞があり、鏡見的に精査すると、この細胞内に注目すべき顆粒状をした小体が集団をなしてあることをまず認めた。これに注目を払つて縦横に研究した結果、本症に特種のもので、濾過性であり、生ける小体であり、ウイルスの一種で後に一般に宮川小体と呼ばれたもので、氏等は、之を病原体となし、内外の研究者によつて、一般的に承認せられ、しかも、Miyagawanella なる一属が、ウイルス中に始めて設けられたものである。この苦心の研究の進行した状態の要点を述べよう。

一、宮川小体は細胞成分ではないかという点にまず非常の注意を払い、あらゆる方面から、検索している。宮川君は、この研究に先きんじて、恙虫病の病原体を同じく大単核細胞に見出ししている。これがリケチアの一種であつた。この所見を大に利用しての結果、宮川小体は、それより遙かに小さい、そして、かなり強く集団的に発育することもわかつた。そして、染色的に、形態的に、その他の性状が、細胞の正常顆位ではない。また病的産物でもないこと

を明らかにしている。これが研究の第一歩というてよい。それからは、この小体を目標としてあらゆる検索を進めてくる。

二、病毒を猿、マウス等に接種したのに、特種の炎衝が起りそれが全身病である。即ち今日いうワイレミアを発し、諸種の臓器に単核細胞の増殖があり、その細胞内にも同様な顆粒小体が多数に現われたのみならず、病症が稍々進むと細胞外にも抛出せられることも瞭らかになつた。

三、組織培養法によつて、この小体が培養せられうることを知つたのみならず、毎日同一の培養標本を鏡下で追跡してゆくと、大単核細胞内の小体が旺んに増殖してゆき、終に細胞原形質を満たし、細胞壁が破れて、小体は、細胞外に抛出せられる状態を明らかにしている。これによつて、本小体は生けるものであることを判明したというてゐる。

四、他方病毒の物理的、化学的抵抗性を決定している。この所見を利用して病毒を死滅させて、同様の組織培養法に附したのに、最早この小体は発育増殖を起さなかつた。

五、本症を動物に罹患させ、発症させて後にアンチモン剤で治療し症状の消褪した後の材料を用いて培養して見たのに小体は発育してこなかつた。これによつて本症の療法にアンチモンの有効なることを知ると共に、また本小体の病原性を知ることができたというてゐる。

六、組織培養を継代し、これを用いて動物実験に附したのに頭著に陽性に現われ、しかも其所に多数の小体が出現した。

七、本症によつて起るといわれている肛門直腸症、婦人のエスチオマーネ、眼のパリノー症等の材料からも、また感

染の初期病巣からも、宮川小体を見出している。したがつて、横痃の病巣のみでなく、あらゆる病巣から一様に発見している。しかもその数は、何時も極めて多数であるという。

八、宮川小体を病原体と見做して、その病原性、生物学的性状、継代培養の可能性、各病巣並に罹患動物より、多数に発見したことから Koch の病原決定の三原則は完全に満たされている。これによつて、これを病原体であると断定している。

九、一九三七年、フランスの Brumpt が来邦、宮川標本を精査し、また一部をもち歸つて、その翌年 *Garninopetros* と共に *Miyagawanella* Brumpt 1938 なる一新属を設け、タイプ、スペーススとして *Miyagawanella lymphorhinomatidis* Brumpt 1938 とした。蓋し濾過性病毒としては、世界最初のものである。宮川君の研究所見の追試は、独、米、英、仏等に旺んに起り、一様にこれを承認しているのみでなくて、ミヤガワネラに属する病原体が、他に数種あることも明かにせられている。例えばオオム病の病原体、人獣の肺炎を起す濾過性病原体の一部もこれに属するという。現在 *Miyagawanella* に配せられているものが八種類あるといわれており、ウイルス学上、極めて重視せられておつて研究は日と共に進みつつあるという現状である。

宮川君が、この重大な新研究をなし遂げたのは共同研究者に負う所が多い。即ち三田村篤志郎、矢追秀武、石井信太郎、中島寿、岡西順二郎、渡辺漸、佐藤久蔵、後藤敏夫、真鍋清明、清水重矢、山本哲夫の諸氏である。

以上宮川君の研究は学術上大なる価値あるものと信ずる。